

ぬ

ぬえごどり (國性鑑)

〔鶴子山〕ぬえ(鶴また鶴)といふ。和名抄に、「唐韻云、鶴性鳥也、漢語抄云、沼江」字鏡に、「鶴、奴江。貝原憲信は、「鶴は鬼つぐみといふ、常のつぐみに三倍ほど大なり、源おほし」と云ふ。平家物語卷四、鶴の條に、源三位頼政が怪物を射取つたことを記して、「かには猿、おくるは狸、尾はくまは、手足は虎の如くにて、鳴く聲ぬえにぞ似たりける」とあるによりて、一種の怪物に取扱はれてゐる。

*ぬかづく 榎田の神にぬかづけば(蛭合戦) 額突くの義。叩頭す。禮拜す。

*ぬかみそ 若菜と味噌の味は屋敷に極まりし(寄庚申) 味噌汁の御恩にかへたお若衆、こゝで死なねば心中が見えまらせぬ(寄庚申) 武家の奉公爲からせば味噌汁の花散りて、近年高野に相勤め小姓廻しは致せしが(藤原歌) あつちばかりのもの、こつちは味噌汁、切らるるは膳の箸、外に道はあるまいか(寄徳太子)

〔味噌汁〕在時武士は粗食に甘んじたもので、殊に念人・奴の輩は骨食に味噌汁を啜り、奴の給料は二半年の切米である。味噌汁の御恩とは、武家の主君の御恩の意。牛鍾記、巻上に、「奴加美曾或作糠欬、未詳」

本説「以来米糘」と入豆鹽「造成者也」。ぬきす あくれば掬ぶ谷水を心ばかりの湯化粧と、ぬきすをだにも參らせず(十二段) 〔實業〕九く削つた竹で編んだ罖で、手洗水の飛散らぬ爲に罖の上に掛置いたもの。伊勢物語二十六段に、「女の親類立ちて、手洗ふ所に糞糞をとめて投棄せければ」

*ぬく よつほどあがけよ其處なぬくめ、見ん事男の敷に入りながら、江戸の供(得しならす(雑権三)) 〔江〕ぬく太郎といひ、痴漢の意。馬鹿。俚言集覽に「ぬく太郎」温湯湯の意也、馬鹿を云。

ぬくぬく 和藤内が月代首提げて來らんと、廣言吐きし某が、一太刀も合はせず矢の一本も放さず、ぬくぬくと味方せば(國性鑑) ようもようも此母をぬくぬくとだましたな(女歌) 〔温温〕うづうしうづぶと、「あたたかなし」を照添す。

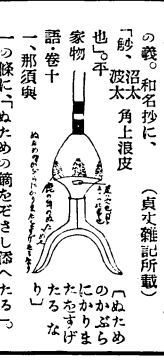
ぬくひうろし 心はさつぱり拭漆の刀懸(大經師) 〔拭漆〕さつと拭うたやうにかけた漆塗。ぬくわか 生ぬるいぬくわか、鍔の柄切つて切折れと喚いてかかる(蛭合戦) 〔温若〕ぬくは其餘を見よ。白痴の若者の義であつて、「ぬく太郎」など云ふ類である。痴漢。人を罵つていふ。この語天正頃よりの語であらう。淺井三代記、大橋安藝守生壁のことに云へる條に「我この屋敷にとり籠り、久政のぬくわかに目をさますときは易れぬ」

*ぬげさんぐう 契りそめしは「昨昨年、拔參宮の道連れに(丹波興作) 〔拔參宮〕ぬげまありしといひ、親や主人に載して、二つそりと伊勢太神宮に参詣するをいふ。拔參宮の最も流行したのは寶永二、三年である。奥林子のこの文に「昨昨年拔參宮」といへるは、寶永二年の拔參宮を當込んだものであらう。日次紀事(延寶年中成)二月の條に「自今月至四月、伊勢參宮徒多、其間爲人臣子者、不告君父而参詣者、是謂脫參」。博多小女郎波枕に「拔參宮の頭字が耳に留まぬ神心」とある、この文意は「拔參宮の頭字を抜かぬ(密貿易)」の頭字「抜」と同じなるによつて、耳に留まつて氣に懸り、神慮によつて己が犯せる拔參宮ひの罪科の題目の恥辱を免かれるやう、守護し給へ」と祈る意。

ぬげぬけ こん様はなう侍のぬげぬけとよう嘘をつかしかやんす(雑権三) 〔抜抜〕巧言を以て書ひ抜ける貌。俚言集覽に「人を欺くをヌクと云、人に欺むるをヌカると云」。ぬさ、この度ばぬさもとりあへず(天智天皇) 〔帯〕細帯をいふ。紙・麻・帛・木綿などを切つて神に捧げるもの。古今集・菅公の歌に、「この度はぬさもとりあへず手向山、紅葉の錦神のまにまに」。

ぬし 煙草屋・ぬし屋・檜物屋・指物屋(用明天皇) 〔ぬりし〕塗師の略。下學集上、人倫門に「塗師人」。ぬしづく この伴左衛門に縁邊し、七百町をぬしづくかとあてばめて置いたもの(反魂香)

ぬすみかやき 盗みかやきの身ではなし(曾根崎) 盗み家儀、即ち盜賊放火犯をいふ。ぬたうつ 「のたうつ」を見よ。ぬための鏑 ぬための鏑差添へて、村重藤の弓持つて(加増曾根) 唐角にて作つた鏑矢をいふ。「ぬた」は鹿の角の義。和名抄に、(貞丈雜記所載) 〔鈔〕沼木角上浪皮也。平家物語に「ぬためのかぶらにかりまにふりまにたりたるなり」とある。



ぬつけり ぬつけりとわし等をだまして(蛭合戦) あのぬつけりとした顔わいの(寄庚申) とどみなく平氣な様にいふ。奥林子作日本振袖始に「歌年ぬつぱりと親をぬらだましたなあ」。同、曾根崎心中に「みなたを見も根めしといふ、あの正直な徳兵衛めをば、ぬつぱりとした顔をしてのやうにだましたやうら、生玉心中に「除の日に商人の店を捨て、何處へぬつぱり這入つて」とある。「ぬつぱり」の語である。

*ぬばり 六字づめの念佛、それも當世粹になり、それを立つる坊主衆もぬばりぬばりぬばりだぬばりだぬばりだ、まだ洒落て後にはぬばりぬばりだ、また世の中千足犬) 六字名號の兩無阿彌陀佛の約號。ぬめ 店の帳面皆ぬめりぬす(水明日) 〔靴〕光澤ある一種の絹布。萬巻麗業袋、四衣

眼・京織物類に、「純光」幅かね尺一尺六寸、丈三丈二尺、しる、色いろいゝし、とびもん、但唐よりも渡る。「この文はぬめりんす」「ぬめ」は「ぬめる」の條を見よ。「りんすはその條を見よ」に「純・純子」をいひかけたのである。

*ぬめる くるりやくるりやくるりとぬめらしやんすは二人がほかに名取川(菅虎申)
ぬらくらする。身林本・節用集・奴部・言辭に「怒海」松の葉一、しもさほそりに、「さてもつれたのきんぎんさまや、きんぎんござらぬめりて暮そ」巢林子作・堀山遊に「小山のやうなる大男まるた舟を漕出す如くぬめくつて歩み寄り」とある「ぬめくる」「ぬめら」と同様の語である。「ぬめる」はぬらくらと痴話狂ひする意にぬいふ。

ぬもし (吉岡梁) もしは盗人。文字詞につらばは(そまじ)の條を見よ。

*ぬりこめ 持弓の重藤。塗籠其數は、いさや白木に側黒の、弓に靱に矢籠矢箱(堀川波鼓)

ぬるて 耳鼻をいいでぬるでの葉に包み(動物類)
「白膠木・膠腐木」といひ、漆樹属の落葉喬木で、葉は鋸齒を有し長卵形の小葉より成り、羽状複葉をなす、花は小形白色で、果實は扁平で短毛密生してゐる。

*ぬれる せんなら桶取といふ狂言は、女に出家がぬれることぢや(壬生大念佛) 若し濡れなどなくは

ぬめる — ねごろをしき

だつるとも、目立たぬやうに物蔭へよつてちよこちよこぬれたがよおんぢや(舟波與作) こりや三毛よ悪い男持つなよ、灰毛猫が濡れかけたら一度が大事もよつてのけ(大經師) 一子禿の功力によつて濡しやうごんの里に馴れ(扇八懸)

大和言葉ひんめき上上の痴話文、見れば見る程我が方へぬれ文(聖德太子) 久米草の濡文が法印様のお手に入り(萬年草) 國に名どりの濡者と聞えしもさる事ぞかし(堀川波鼓) とりわけはやるば濡事と、

につこと會釋し申しける(鶴丸) 誰かは知られど此庵の濡坊主、所こそあれ佛壇に女寝させてささめ言(鶴丸)

濡男女惚れてでれでれするをいふ。惚れる。交接する。色道大鑑に「ぬれは當世の名目なり、惚たる貌なり、思ひよしたる風情をなしし言ひなす處をさしていふ。又ぬれ者とす時は心すこしかはれり」。

濡れは心すこしかはれり。若し濡れなどをくはたつるとも「濡れは、動詞ぬれる」の釋成名詞である。「ちよこちよこぬれたがよおんぢや」とある「濡れ」は交接する意である。書方野撰・心中大鑑(寶永元年刊)巻四に「いか程のあやまりにても最早ぬれぬまきそにて候へ、取返しのならぬ世に御恥かしなからまきと申まらば候」とある「ぬれぬまき」は交接する意である。「濡れかけ」は惚れて色事をしかけるをいふ。

濡れかけは惚れて色事をしかけるをいふ。「濡れ」は戀に身を飾立てる遊里を云うたのである。曾我屋八景のこの文は、百日曾我

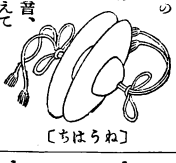
の 三部經の條に「一子出家の功力によつて妙莊嚴の悟を得」といへると對照すれば、そのもぢつた文意明かである。「濡文」は艶書、痴話文のこと。「濡事」は好色問の情事即ち色事のこと。「濡坊主」は好色坊主のこと。

*ぬちはち 太鼓・鉦も鏡もやがて入らうと涙ぐみ(永明日)

「鏡」寺院にて用ゐる樂器。響銅にて作り二枚打合せて鳴らす。葬送の興が寺に入來つた時、また引廻を渡す時などに鳴らす(序云、鉦と鏡とは別の物であつて、元祿二年刊・今様かきは本・元祿二年刊)「心耳を置ます等の音、鏡を鳴し鏡をつきと見えたる、それが混じて觸に示すやうな樂器の稱となつたのである。

*ねおびる 城中の侍ども思ひ寄らざることなれば、閑の聲にねおびれて慌てふためき度な失ひ(伊豆日記)

ねがひて 油掛町八百屋伊右衛門淨土宗のねがひて、了海坊の談義に(觀手)後生を願ふ。



〔ちはらうね〕

*ねぎ 禰宜の息子か青葉賣か(國性爺)
「禰宜」神を祀ぐる人、即ち神官の稱。また官司、神主に次ぐ者をいふ。

ねぎとの 祇園林も近ければ、ねぎどのといふ蟲もあり(弘鑑殿)
「ねぎ」とも「ねぎむし」とも云ひ「ばつた」のことである。和漢三才圖會卷五十三、化生類に「ねぎ」俗云禰宜、按鏡似蟻而小長一寸許、青色安首兩眼間廣、但露斯兩眼間狹、以之爲異耳、其首似社人者立烏帽子云、故俗呼曰「ねぎ」云云。

*ねこじ ねこじに飾る唐桃を先に押立て(西玉母)

ねこなごゑ よい雄猫添はそぞえ、かばゆやと猫まで聲(大經師) かねいものやと猫まで聲(井筒)

ねこまた 伊駒にあらぬ猫またの化損ひの古婆、白髮齒抜のちよば口して(井筒)

ねごろをしき (開八州)
「猫又」多年月を経た老猫。古來古猫は性獷猛で化けるものと思はれてゐた。徒然草第百八十九段に「奥山に猫又といふものありて、人を食ふなると人のいひけるに」。

ねごら折敷 紀州根來寺及びその邊より製出した折敷の稱。和漢三才圖會に「昔當寺(紀伊根來寺)及境内作之木塗飯器于今在在有之、形根來碗、同折敷、其塗無今似之者也。萬寶全書八に「根來物(塗物)。舍合折敷あり、紙をしめしてすりてみれば紙に漆つくな